

研究調査報告

国策紙芝居—長野県御代田町・栃木県小山市調査

大串 潤児

(非文字資料研究センター 客員研究員)

2020年2月、神奈川大学で開催された研究会を最後にCOVID-19の影響により紙芝居班の研究・調査活動は事実上ストップした。こうしたなかでも、個人的な努力により未調査地域についての情報収集や、所蔵先の新規判明、新規紙芝居の発掘などの作業は行なわれており、感染症流行が一定程度安定化していた2020年晩秋、久しぶりの共同調査が実施された。本稿は、筆者が行なった個別調査もあわせて、タイトルにある2地域の調査報告を行なうものである。

I. 長野県・浅間縄文ミュージアム調査 (北佐久郡御代田町)—2020.11.6

(1) 調査の概要

長野県についてはすでに「信州戦争資料センター」所蔵のコレクション調査および紙芝居での街づくりを实践している須坂市のサークル（「信州須坂紙芝居のさとプロジェクト」）の方々との交流、須坂市立博物館所蔵紙芝居調査という成果がある（2018年11月23～25日）^{*1}。しかし、長野県各地博物館・資料館・文書館などの十分な調査が行なわれているわけではなく、各地の地域史的文脈のなかでの位置づけもきちんと出来てはいない。幸い県を代表する新聞である『信濃毎日新聞』には創刊号からのデータベースが整備されており、「紙芝居」「画劇」などのキーワードで検索することも出来る（2018年6月、長野県立図書館などで調査）。こうした基礎的な情報のうえにさらに地域史料の発掘と確認が求められるであろう。

そんな折、北佐久郡御代田町にある「浅間縄文ミュー

ジウム」の堤隆氏から館に国策紙芝居（戦時紙芝居）の所蔵があること、夏の戦争関連企画展で展示したこともあること、などの情報を戴いた。さっそく2020年11月6日、晩秋の浅間山のふもとにある「浅間縄文ミュージアム」を訪ねた。

「浅間縄文ミュージアム」所蔵の戦時紙芝居は10点である。残念ながら「新規発見」（これまでの調査でタイトル・実物とも未確認のもの）、「所蔵判明」（タイトルなど判明しているが現物未発見のもの）の作品はともに存在しなかった。しかし、10点のうち現段階（2020年11月末）では4点が国立国会図書館での所蔵が確認されているだけである。したがってこの4点は国会図書館以外では当館だけが所蔵するという意味でたいへん貴重なものといえる^{*2}。

コレクションは、地域の教員で郷土史家でもある方からの寄贈というが、その由来の詳細は残念ながら不明である。

(2) 所蔵作品からうかがえる論点

御代田町のある長野県東北部・北南佐久郡は、満洲移民の「模範村」（大日向村）をかかえており（紙芝居「大日向村」もある）、満洲移民関係・学校教育関係・産業組合関係（一戦後に佐久病院に結実）、さらに翼賛文化団体・「佐久文化協会」（井出一太郎らが参加）など、紙芝居運動に関連が強い社会の動きがある地域でもある。『信濃毎日新聞』記事にも北佐久郡高瀬小学校〔現在、佐久市〕教員による「紙芝居一座」が常会や婦人会での上演活動を開始した記事や（1940.11.2）、岩村田警察特高主任による「防諜」関係紙芝居実演（1942.7.14）、岩村田町翼賛壮年団文化部（部長は寺院住職）による「防諜」「戦時生活確立」をテーマとした紙芝居実演（1942.7.19）、などの記事がある。ちなみに『信濃毎日新聞』記事には上田小県地方の産業報国会関係、各郡の農会関係のものが多い。また佐久市立図書館に所蔵されている『中部日本新聞』（後に『信濃佐久新聞』と改題）1939.1.1付には「時局紙芝居」として「忠烈人馬一体」（池保夫・作、瀧伸二・画）が掲載されている。

当館所蔵のコレクション自体が「まとまり」を持つものかどうか（一例えばまとまって個人が所蔵していたなど）不明だが、個々の作品から興味深い論点を引き出せ



写真1 ファイルに入れて保存されている。



そんなことも確かである。ここでは問題提起的にはあるが、以下、指摘しておく。

① 『戦ふ少年隊』は全国販売購買組合聯合会が素材を提供してつくられた作品である（1942.6 脚本・堀尾勉、絵・小谷野半二、日本教育紙芝居協会作品番号301）。地域の子どもたちが養蚕の勤労奉仕を行なうことが描かれている。繭増産に関する紙芝居では上田小県郡養蚕組合の技手が「繭を増産ませう」という紙芝居で町村巡回指導を行なった記録がある（『信濃毎日新聞』1940. 8. 10）。

また周知のように長野県は産業組合運動がさかんであり、特にその実践運動団体である「産業組合青年聯盟」（いわゆる産青聯）運動が活発な地域であった。産青聯はやがて翼賛壮年団（翼壯）に接続し、また農山漁村文化協会なども提携しつつ地域の文化運動を行なっていく。養蚕地帯であり、かつ産業組合（購買販売であるか）関係の作品が存在することは地域との関連がうかがえて興味深い。脚本を書いた人物が堀尾勉であることも重要であろう。ちなみに産業組合と農会が統合して農業会になるのだが、佐久病院の前身は農業会管轄の医療機関である。

② 当館には『海國の民』『我は海の子』『海への希望』と「海」を題材にした作品が3点存在する。海なし県（内陸県）である長野、それもさらに内陸部の佐久地域で「海」とは、どのような問題を示すのだろうか。諏訪市の事例だが、「海国少年教育」＝「海の少年国民として海の日本をハツキリ意識させ様と課外教材として使用する」ことを目的に、『海國の民』『我は海の子』などの作品が市内の高島・城南・豊田・四賀の各小学校へ贈呈されている（『信濃毎日新聞』1942. 11. 25 夕刊）。「海」についての紙芝居は、県内に広く頒布されたようである。

詳細は今後の課題だが、アジア太平洋戦争期（特に1943年以降）、地域の兵事行政、学校教育にとって重要であったのは「少年志願兵」数を確保することであった（一滿蒙开拓青少年義勇軍および軍需工場などへの少年工送出と競合するという論点があるがこの問題は別途検討課題）。「少年兵」といった場合、陸軍・航空兵はもとより、元来が志願兵を基礎として兵員を確保していた海軍にとってはより重要な問題であった。

また商船隊（物資輸送）のための「海員」（一般船員）を確保することも重要であった。地域では「海洋少年団」などが組織され、海（海軍・海運）への理解と啓蒙を行なう教育活動が盛んになっている時期でもある（この点について、圓入智仁『海洋少年団の組織と活動』九州大学出版会、2021年参照）。長野県における志願兵募集の実際についてはほとんど未解明だが、こうした論点とも接点をもつ作品所蔵状況であるともいえる。

以上に述べた論点についての詳細な分析は今後の課

題だろうが、ここでは調査概要と館所蔵作品の意義（および論点）を指摘して報告にかえたい。調査の機会を与えて下さった「浅間縄文ミュージアム」の堤隆氏に御礼申しあげる。

Ⅱ. 栃木県小山市調査 —2020. 11. 28～11. 29

(1) 調査の概要

栃木県小山市は渡良瀬遊水地の東側、紬織物で有名な結城の西側にひろがる、養蚕業を基礎とした市場と織物の街である。2020年11月28日、小山市文書館を訪ね関係史料の搜索をしたが、目録上での確認にとどまり目立った成果は得られなかった*3。

29日、共同研究メンバーの新垣夢乃氏と合流して小山市立博物館所蔵のコレクション目録（全34点）を基礎に現物を確認、新規発見のもの4点を撮影した。

- ① 『麻と兵隊』 農山漁村文化協会／日本原麻統制(株)企画 1944. 3. 22
*ただし後日「人形劇図書館」に所蔵が確認されている（2020年2月撮影）。
- ② 『兎の出征』 農山漁村文化協会 1941. 10. 20
……新規発見
- ③ 『戦ひの道』 大日本画劇株式会社 1943. 4. 5
……新規発見
- ④ 『山本元帥』 画劇報国社 1943. 11. 20
*ただし後日確認したところ「非文字」が2018年に購入・所蔵していたことが判明。

順調に撮影が終了したので、非文字資料研究センター未所蔵の⑤『建設の礎』（大政翼賛会宣伝部 1941. 12. 25、子どもの文化研究所のみ所蔵）、⑥『共同の力で防げ病蟲害』（農山漁村文化協会、1942. 8. 10、国会図書館のみ所蔵）、など3点を追加撮影した*4。

市立博物館所蔵紙芝居コレクション、所蔵の由来について博物館学芸員から以下のようなお話をうかがった。コレクションは小山市内の寺院・保寿寺*5から本堂改築にあたって確認されたものをまとめて寄贈されたもの



写真2 小山市立博物館所蔵紙芝居を寄贈された真言宗寺院。

である（おおよそ10年ほど前）。当主（若い）の話によると、疎開児童向けではなかったか、というが未確認である。保寿寺を訪ねるも、突然の訪問のため当主は不在であり、詳細の確認は今後の課題となった。ただし、市立博物館長が先代住職の教え子であった関係からいくつかの情報が得られた。①保寿寺では保育園・幼稚園は経営していなかったこと、②先代住職は中学校国語担当教諭であったが、教職につくのは戦後のため、紙芝居についてはさらにその前の住職時代だろうとのこと、である。

(2) コレクションの特徴、興味深い事実関係など

小山市立博物館所蔵コレクションの特徴は以下のよう
にまとめられる。

- ① 真言寺院ということもあり、仏教関係の紙芝居が存在する（『弘法大師』『花祭り』など）。
- ② もともとの紙芝居所蔵の全容はもとより不明だが、市立博物館所蔵分には、「農山漁村文化協会」製作の紙芝居が比較的多く存在する。逆に日本教育紙芝居協会のもは相対的に分量が少ない。
- ③ ②と関連して紙芝居函に「中村農会」宛の書き込みや、『病虫害』『病父の叱咤』（いずれも農山漁村文化協会製作）を下都賀郡中村（小山市内、旧村）小字集落ごとに貸付した（順繰り）台帳簿（簡易的なもの、紙芝居ケースの裏面に添付）もあり、食糧増産を目的とした農業・農村向け紙芝居が多い。農山漁村文化協会作成のものが比較的多いということとも関連するが、地域（農村）における紙芝居受容の系統的分析（農会・産業組合系列→農山漁村文化協会系列作品、学校教育系列→日本教育紙芝居協会系列作品）といった論点が見えて来る。ただし、旧所蔵者は「寺院」であり、住持の社会的地位（教員？あるいは農業関係の地域サプリーダーかどうか、など）の確認が必要か、と思われる。
- ④ 疎開児童向け、ということは作品所蔵状況からは確認できなかった。むしろ増産など「大人向け」のものが多いような印象を受けた。ただ大町雅美『栃木県の百年』山川出版社、1986年によれば、小山市地域（また保寿寺がある中村地域）をふくむ下都賀郡は寺院への疎開（東京都牛込区などから）が比較的多い地域でもあって（他は日光や鬼怒川の温泉地域→旅館への疎開）、今後、検討・確認すべき問題でもある。

疎開児童向け、という論点は、浦上喜平史料の紙芝居実践史的検討や地域の視点からする疎開史研究、さらに翼賛文化運動のなかで末期に提唱される「疎開文化」論の具体的意味論的検討においても、重要であり、本研究会でもほとんど議論されていない問題であると思われる。

そのほか栃木県における紙芝居実践・運動についての論点として注目すべきは次のようなものだろう。

第1に、栃木県は国民精神総動員運動初期から紙芝居に注目、活用を行なっている県の1つであること。その代表は小山市もふくむ県南地域、安蘇郡田沼町（現在、佐野市）の町長自作の紙芝居である（拙稿「戦時紙芝居論」『国策紙芝居からみる日本の戦争』）。

第2に、県産業報国会も紙芝居講習会を積極的に行なうなど比較的熱心にとりあげていること。小山市立博物館コレクションには大日本産業報国会関係の紙芝居（今回、新規発見の『戦ひの道』—千葉県九十九里浜の砂鉄採集産業における女性労働と夫である前線の兵士の交情の物語）が1点ではあるが存在している。栃木県は農村県という視点で見がちであるが、地域における産業報国会運動とも関連させる必要がある。ちなみに、小山地域は近接地が茨城県結城町であり、生糸と織物（結城紬）の一大生産地である。『チョコレートと兵隊』の舞台でもある桐生や足利など、北関東（下野）の伝統的な織物産業地帯のベルトに載っている地域でもあり、繊維産業における産業報国会運動と紙芝居（従来は炭鉱などが焦点になっていた）といった問題も浮上する。

第3に、ただし、『教育紙芝居』『紙芝居』をみても栃木県は紙芝居運動が盛んな地域であるとは必ずしもいえず、また生活綴方の運動も注目すべきものは知られていない。農民運動の展開もあり、また翼賛壮年団運動では「農村共同化」の試みが盛んであったようだが（栃木県翼賛壮年団本部編『農村協同化運動の体験を語る』栃木県翼賛叢書第2輯、1942年）、こうした社会・文化運動との関連も現時点では不明である。

しかし、小山地域における紙芝居実践については農山漁村文化協会の位置が大きかったことが想定できる。農山漁村文化協会（以下、農文協と略）は日本教育紙芝居協会・大政翼賛会などと並ぶ紙芝居製作、配給の文化運動団体であり、戦時期においては様々な農村文化運動を指導し、自ら実践していた*6。本研究班においても農文協の活動や、同会作成の紙芝居についてはまとまった検討は行なわれていない。機関誌『農村文化』にも紙芝居関連の記事が掲載されており、系統的調査が必要である。

『紙芝居』第7巻第8号（1944.8.10）掲載の農山漁村文化協会・小野勝雄「紙芝居運動三年」によれば、農文協の紙芝居運動は「協会の重要な仕事になつてゐる藝能文化運動の一単位」「文化運動機関の一細胞」となっているという。したがって紙芝居はそれ自体単独で問題になるのではなく「演劇や指人形劇や音楽、舞踊、室内遊戯等、または映画や幻燈等との関連の上でないと本当の姿を判断することがしにくい」。農文協の紙芝居事業は1941（昭和16）年度から本格化し、1943年までに地域農村部への紙芝居舞台無償配給数4,924台*7、単独講習会70回、競演会23回、作品製作数24種、芸能講習会（紙芝居を含む）20回の実績を記録してい



た。しかし、1943（昭和18）年度、農文協は11県にわたって芸能講習会を開催したが、「その内容は素人演劇・指人形劇に重点を置いて、紙芝居については前記二藝能と併せて「作劇法」とか、紙芝居界の現状をのべるといつたことに限られ、実演技術のむし返しは避け」ている。これは農文協の地域（農村文化）についてのそれなりの評価に基づく施策であり、農文協には「講習をうける人たちは各地方の農業会、翼賛会とか学校関係の人が多く、その人たちは、只紙芝居だけにすがつてゐるのではなく……藝能全般に通じてゐる」、従って「紙芝居は村の藝能文化の中に総合的に生かされるのが、吾々の願ひである」という認識が存在していた。またそこには、「地方指導者の性格は万能タイプが多いので、実際の農村文化運動といふものは、多くその手によつて行はれてゐるのであるから、中央から持込むいろいろの運動は殆ど一人で消化しなくてはならぬのである。與へる方は多くうけとる方は一といふのが現状である。まして男手の少くなつた現在では一層その弊が多い。これは文化行政の煩雜なところで文化運動関係者の心すべきことなのである」といった戦時社会の実像と文化運動側の要求の落差という問題もあった^{*8}。

小野勝雄は、農文協の「紙芝居事業はどういふ態勢にあるか」と問い、「舞台の配給は望めない、講習会もない、僅かに競演会が継続事業として各地に行はれるのを見る程度で、作品、製作数も減少するだろう。近く実施される農村生活明朗化講習会にも、紙芝居はふくまれてゐない。このやうにみると甚だ沈滞の氣にみたされてゐる」と評価せざるをえなかったのである。

同時に地域調査においては紙芝居の利用の拡大・普及、食糧増産・貯蓄奨励の有効・効果大、などの報告も寄せられていて、農文協中央側との意識の差異が論点になるだろう^{*9}。ただこの論点も、地域における芸能文化の総合性をふまえて議論されねばならず（注9記載の拙稿はその点について不十分であった）、また農文協の文化運動指導者であった梅村一郎のいう紙芝居実演についての「新派活弁調の流れをひいた演技の誇張形式が、長年地廻りの芝居や浪花節語りから、耳にたこになるほど、沁みこんでゐるから、ちよつとやそつとのことで、これが修正されるものではない。恐らく正当な紙芝居や素人演劇を指導する人にとつて、この問題は最も困る問題として今後も残ることであらう」という観察も無視できないだろう^{*10}。

ただ、農文協の史料、刊行物を所蔵・公開していた「農文協図書館」は2015年11月に閉館している。福

島大学食農学類に移管された農文協史料の調査・確認が必要な段階である。

栃木県小山地域調査は、農村における紙芝居実践、紙芝居普及のルートについて新たな知見と課題を確認させてくれるものであった。

おわりに

共同研究のよさは異なる関心をもつものが共通のテーマで議論しあうことの醍醐味と、現地調査での人びととの出会い、そして何よりも「現地に立ち、想像力を働かせること」の楽しさだろう。渡良瀬遊水地をのぞむ整然と圃場整備された田園風景のなかには、かつての鉱毒事件や戦時農村紙芝居実演の様子をうかがわせるものはあまりに少なかった。

【注】

- *1 鈴木一史「戦時下日本の大衆メディア研究」班 信州資料調査報告「News-Letter」No.42、2019.9.
- *2 タイトルのみ掲げる。「海國の民」「戦ふ少年隊」「明朗一票 翼賛地方議会建設のために」「我は海の子」。
- *3 小山市における旧村をふくめた行政文書の残存状況は悪く、「小山市史料所在目録」第4集（公文書関係）でみてもほとんど見るべきものはない。もちろん村会議事録などをていねいに見るとということも考えられるが、期待は薄い。ただいくつかの村には銃後奉公会の事業計画史料があるようで（旧豊田村）、家分け文書（日向野家、天谷家）にある軍関係・総動員関係の記録とあわせれば多少の記録は見つかるかもしれない。
また「小山市史 史料編 近現代II」には、翼賛体制期の農業団体リーダーであった「山中茂三郎日記」が収録されているが、紙芝居（あるいは後述する農山漁村文化協会）関係の記載はほぼない。ただ食糧増産のための慰安会（映画会）企画などの記事はある。
- *4 ほかに⑦『焼夷弾』（大阪児童文学図書館のみ）を撮影したが、小山市立博物館所蔵本は落丁がある [21～24の4枚]。
- *5 調査終了後、川越調査に赴いていた原田広氏と合流、保寿寺を訪ねた。JR小山駅からクルマで10分ほど、水田地帯のなかにある簡素な真言寺院であった。保育園などの施設は併設されていなかった。
- *6 農文協については「社団法人農山漁村文化協会三十五年史」同、1976年、『同 六十年史』[本編・資料編]1990年、『同 六十年略史』2000年、原田勉『評伝 岩淵直助 農文協の五十年史』1995年がある。
- *7 当初計画では全国町村に1ヶづつ、12,000台を計画していた、という。
- *8 農文協独自の地域文化政策については千葉県高根町・大山村・小湊町を対象に設置された「文化実験村」の構想と実態が興味深い（『文化実験村設定要領』農山漁村文化協会、1945年1月、謄写刷）。この点につき最新のものとして大蔵真由美「戦時期農村文化運動の実態に関する研究—社団法人農山漁村文化協会の文化施設実験村の取り組み」『松本大学研究紀要』18、2020.3があるが、先行研究整理に難があると思う。
- *9 「芸能文化ノ食糧増産並ニ供出ニ貢献セル事例」農山漁村文化協会、1943年。拙稿「戦時紙芝居論」『国策紙芝居からみる日本の戦争』、279頁。
- *10 梅村一郎「農村と紙芝居 二三問題を拾ふ」『紙芝居』第7巻第5号、1944.5.10。なお梅村は紙芝居が普及した地域（府県）は貯蓄奨励運動、厚生運動に「熱心な」地域であったと指摘している。